

水稲単作から田畑複合経営に変わる。1人当りの面積も5ha増え、当分の間は7.5haずつ稲と畑作物を半々に作付することになる。畑作においても機械が駆使されることになる。

(3年 坂井陽子)

## 那 須 野 巡 検 ( 浅海先生 )

3月7～9日

3月7日、私達は、冬の寒さのまだ抜けぬ西那須野駅に降り立った。那須野巡検のはじまりだった。寒かったのは事実だが、期待していた雪のかけらさえ見られず、妙に乾いた感じだったのが印象に残っている。

はじめての土地というのは、大変興味深いものだが、それだけに不案内で、私達はバスを乗りこしたりして、巡検第1日目から失敗をしてしまった。しかし、バスの運転手さんが、目的地まで無料で乗せていってくれ、思いがけず、土地の人々の暖かさにもふれることができたような気がした。

その日は、那須野についての講義とスライドで終った。

私達の翌日からの観察課題は以下の項目についてだった。

1. 那須野盆地の地形面の識別
2. 各地形面の構成地質の露頭
3. 各地形面上の土地利用景観
4. ボーリング
5. 那須疏水その他の那須野の水利
6. 那須岳の火山地形

翌日は、バスとジープとで、冬枯れの那須野をフルにまわったという感じであった。

宿舎を出て、竜城公園のある小高い丘に登ると、金丸原台地、権限山丘陵、蛇尾川河道が一望に見わたせ、遠く那須の山々が白く横たわっていた。静かな風景だった。

バスとジープは、ここを起点とし、金丸原台地を抜け、まず高岩に着いた。ここで、ボーリングをし(やってみると、すぐ礫層にぶつかってしまった)、黒磯へ向った。

黒磯とその次に行った西岩崎では、ルートマップ作成のため、比高測定などを行なった。西岩崎は、那須疏水の取水地である。ここに来る途中、那須疏水の改修工事も見えてきたが、これが乏水性

のこの土地を支えた水路だったのかと思うと、感慨深かった。

この後、関屋宿を経て、宿舎に戻った。関屋宿は、かつての宿場町で、古い家並がその面影を残し、落着いたたたずまいを見せていた。

3月9日、那須岳へ。平地では見られなかった雪が、ここにはあった。ケーブルは、まだ操業をしていなかったため、頂上まで行くことができず、非常に残念だった。しかし、まだ足跡のついていない雪を、ふみしめて歩くのは、何て気持のよいことか。風紋のついた雪が、目に焼きついている。

3日間の日程を終え、午後、朔風の北関東をあとにした。 (3年 山本和子)

## 紀伊半島巡検 (齊藤先生)

3月6～8日

今回の巡検は地元での聞き取り調査が主な目的であった為、下調べのないまま参加したが、質問の上での不便を除けばかえって先入観のない新鮮な解答を得ることができて、その点では意義があったかと思う。

3月6日 東京を8時の新幹線で立っても紀伊半島の今夜の宿泊地白浜へは17時22分着と約9時間30分もかかり、陸の孤島ということが実感として感じられた。このような訳で第1日目は車窓景観の観察のみに止まった。名古屋から松阪までは伊勢平野に広がる水田と工業地帯であったが、松阪から太平洋岸の長島へは降水量の多いことで有名な大台ヶ原を水源にもつ宮川の開析谷に沿って谷壁の杉林を見ながら紀伊山地東端を横断した。長島から串本まではリアス式の海岸線が続き、湾奥の狭い平地に沿って鉄道が走っている為、照葉樹と半農半漁らしい寒村が幾つもの小さなトンネルの合間に見え隠れした。串本から白浜にかけてはこの照葉樹に加え羊歯類が多くなり、小雨模様の天候にもかかわらず暖地域という感が一層強くなってきた。

3月7日 午前には御坊市役所で企画室長の概観説明の後、教グループに分かれ各課へ出向いて調査を行った。その結果御坊市の主産業は農業で、中でも山地の夏みかん(最近では需要の関係で甘夏に切り替えている)低地のえんどう・すいか等の畑作物(冬でも霜が降りないため露地栽培)が特徴的な産物で、最近低地では水田から畑への転換が盛んに行われているということ、また以前は林業が盛んで河口の日高港は材木がいかだで運ばれ、付近の製材工場は活気を呈していたが、現在は